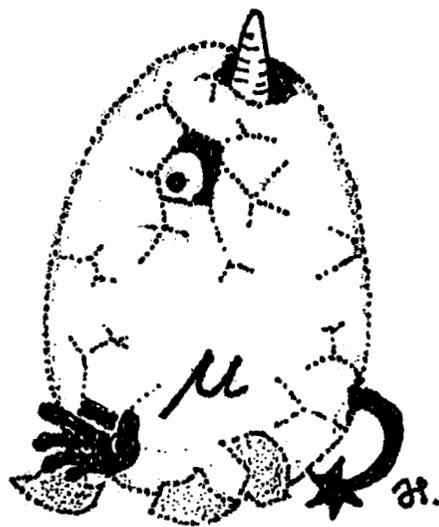


日本生物學會誌

第 20 号



日本生物學會

1985年 6月14日

第 20 号

△△ も く じ △△

ナマケモノ : カッコウとヨシキリ	685
にごりめ小僧 : 閑人だより (1)	692
小林美香 : 「連想ゲーム」 — 教育編	700
丹後支部長 : 丹後だより (2)	704
奥野良之助 : 魚陸に上る (13)	706
編集局だより	715
第11~20号 総目次	724
1984年度 会計報告	726

カ ッ コ ウ と ヨ シ キ リ

ナ マ ケ モ ノ

ある雪の深い地方に、金茶話大学という名前の大学が在りました。この大学の教授会ではいつも、お茶を飲みながらお金の相談ばかりしていたので、こんな名前になったのだそうです。昔、たまたまこの大学がお城の跡に建てられていたので、「お城の中の大学」というキャッチフレーズで宣伝されていました。又それが唯一の特色でもありました。そういえば、よく立派な城門の写真入りで受験雑誌に紹介されていたものでした。ところが近頃、とある山奥に移転してしまいました。そのためにこの大学は、たった一つの特色さえもなくなってしまって、「ただの地方大学」になってしまったのです。それに街から遠い山間に建てられているために、通うのにとっても不便です。特に冬になると雪が深く積もって、学生も先生も職員もとても苦労しています。一方、当時移転にとっても一所懸命だった学長や知事や市長は、今、雪の降る事のない暖い地方に引っ越して、のんびりと余生を過ごしているそうです。その外にも、建築会社の社長は、大学の建物を建てて沢山もうけたので、大きな自宅を新築して喜んでいるそうです。

この山奥の金茶話大学のキャンパスの真ん中を通過して、一本の川が流れています。山あい川が流れている所を、両側の山を崩して造成したために、こんな無理な配置になってしまったのです。ところが、大学が移転して来て以来、時々この川に魚が死んで浮くようになりました。調べてみると、強い酸が垂れ流しになっている為らしいのです。だれが流したか、いつも分からず仕舞で、そのうちにうやむやになってしまいます。排水処理施設さえ完全に整備されていれば、川まで流れ込むことはないのですが、そんな余分なお金はなかったのです。それで何時からともなく、又だれからともなく、この川は「酸酢の川」と呼ばれるようになりました。この川でキャンパスが真っ二つに分けられている為、対岸の方に何か用事でもあるとその度に、わざわざ酸酢の川を渡って行かなくてはならないのです。この川に架かっている橋の上はひどく風当たりがひどくて、特に冬の間はとても寒く、凍えてしまうのでした。

その川の兩岸には、少しばかりのアシ原がありました。そこは何の手入れもされず、ただ放置されていました。除雪や暖房に沢山のお金がかかるので、川岸の整備をするためのお金な

ど、どこにもなかったからです。そのせいで、夏になるとアシはびっしりと伸び放題に伸びたので、人間は立ち入るところか近寄ることさえ出来ませんでした。おかげでアシが茂るころになると、毎年何羽かのオオヨシキリやコヨシキリが渡って来て、巣を架けていました。オオヨシキリはギョギョシギョギョシ ケケシケシ チカチカと、コヨシキリはそれより小さい声でジョッピリリジョッピリリ ギョッギョ キリキリチリリと盛んに鳴き合っていました。人間達が近寄らないので、オオヨシキリもコヨシキリも安心して巣をつくり、ヒナ達を育てることが出来ました。ところが、ちょうどヨシキリ達が巣作りをしているころ、このアシ原にもカッコウがやって来て、木の枝や電線に止まってしきりにカッコウカッコウと鳴いていました。カッコウは自分では巣を作らないし、ヒナを育てることもしない鳥なのです。このアシ原にやって来た目的は、ヨシキリ達がせっかく作って卵まで生んでいる巣に、自分の卵を生みつけ、そしてそのヒナを育てさせる為なのです。ヨシキリは、自分の卵とカッコウの生んだ卵を抱いて暖めます。ところが、カッコウの卵はヨシキリよりも一足早くヒナにかえって、まだ羽毛も生えず目も開いていないのに、そのヒナはヨシキリの卵を全部巣の外へ放り出してしまうのです。ヨシキリは、本当の自分の卵を殺されてしまっても、そうとは気付かずに、カッコウのヒナを一所懸命育てるのです。

ところが、まったく偶然なことに、この大学の利学部(かっこう)という名前の教授がいました。利学部とは、どうすれば自分にとって利益になるか、又他人を利用して出世できるか、を、利論的に考えて研究する所なのです。このような利学部で長い間研究し、出世すればするほど、当然のことながら抜け目のない目付になり貧相なヒゲを生やししたりするようになるのですが、これらは皆、学会でエラそうな顔をするのに必要な事なのです。何せ、長い間利学的研究を続けて来たという、明白なステイタス・シンボルなのですから。

桜の花もようやく咲いて、やがてヨシキリ達が南から渡って来ようかというある日、これもまたまったく偶然な事に、良切(よしきり)という名前の学生が欠考教授の研究室にやって来ました。良切君はなぜか、水生研究室と書かれてある部屋の戸を開けました。と言うのは、この部屋は本当は自分の講座の部屋ではないのに、欠考教授が勝手に入り込んで、自分の部屋として使っていたからなのです。良切君がその部屋に入ると、普段は国会答弁の時の首相のような教授の顔が、たちまちにこやかな顔に変わり、猫なで声でこう言いました。

「やあ良切君、君のような優秀な学生が来てくれてうれしいよ。さあ、こっちへ来て掛けたまえ。」

というのは、今年この講座に配属された四年生は一人だけだったからです。欠考教授は去年も学生に就職の世話などまったくせずに、卒業のころになっては、

「セロックス代を払わないと単位をやらない。」

などと、意地悪丸出して言ったものだから、学生達は皆この講座に来るのをいやがったのです。

でも教授に“セロックス代を払わなければならない”のは法律違反なのです。法律では、講座に現金は有り得ない事になっているのですから。良切君も初めは隣の講座を希望したのですが、

「学生の配属は平等に」

という欠考教授の御都合平等主義のために、仕方なくせめて1人だけでもと、学生達はアマダクジで決めることにしたのです。そのアマダクジに当って、良切君はこの講座に来ることになったのです。でも、

「アマダクジで負けたから来ました。」

などと言ったら、セロックス代を払っても単位はもらえず、卒業出来なくなりかねません。だから、

「隣の講座は人が多過ぎて、満足に実験も出来ません。こちらは広いから自由に実験出来ますね。」

と言いました。欠考教授は心の中で何かチクリと感じましたが、にこやかな顔は崩しませんでした。そして“不味さの分かるインチキコーヒー”を勧めながら、

「ところで、君の卒業研究のテーマだけどね、君はどんな研究をしたいと思っているのかね。」

と聞きました。でも本当は、良切君の希望を聞くつもりなぞ、まったく無かったです。去年の学会での事ですが、よその大学の研究室から、カイコの発生について面白そうな研究が発表されたのです。当然それを聞いていた欠考教授は、

「これだ！」

と思いました。同じ事をゴキブリで真似れば、まだゴキブリを使ってやった人はいないので、それは新発見です。もちろん、さらに南京虫でやれば、またまた新発見です。同じようにニクバエでもやれば、またまたまた新発見です。皆、学生を使って実験をやらせるのだから、教授は気楽なものです。そして、それぞれの新発見を論文に書けば、その度に教授の業績が一つ増えるのだから、笑いが止まりません。という訳で、良切君にはゴキブリを実験材料にして、カイコの場合と同じ実験をさせる事に決めていたのです。四年生になったばかりの良切君は、そんな事とは知りませんでした。彼は子供のころから生き物が好きで、ウサギや伝書バトやススメも飼っていた事がありました。大学生になった今でも、双眼鏡を首に下けては、時々バードウォッチングに出かけているのです。それに、三年生の時の実習では、ニワトリのハイの心臓がドキドキ動くのを見て、とても強い印象を受けたのです。それで、はっきりとそう決めていた訳でもなかったのですが、

「鳥の発生で、何かしたいと思っています。」

と答えました。というのは、そこは発生学の講座だったからです。すると教授の顔は、たちまち国会答弁の首相の顔になりましたが、それは一瞬の事で、すぐににこやかな顔にもとって言

いました。

「鳥って君、どんな鳥かね。」

良切君は、本当は野生の鳥を考えていたのですが、何とはなくそれは無理だろうと思って、

「ニワトリです。」

と答えました。

「ニワトリって君、簡単に言うけどね、ちゃんと卵を発生させるだけでも大変なんだよ。

専門家でさえ仲々難しいんだ。君の為を思って言うんだけどね、卵の世話をするだけでも苦勞すると思うよ。」

と、いかにも親切そうに教授は言いました。でも教授は、ニワトリの卵をフ化させたことは無かったし、専門家に知り合いもいませんでした。良切君は三年生の時にフ化させた経験はあるのですが、教授があまりはっきりと断言するものだから、もしかしたらそうかも知れない、と思って黙っていました。すると、

「その点、ゴキブリは楽だよ。世話は簡単だし、よく増える。発生の実験材料として、これ以上の物はないと思うよ。発生の原理はね、君、すべての生物に共通なんだから、ニワトリでやりたい事があるんなら、ゴキブリでだって出来るよ。ゴキブリは素晴らしい生き物だよ。」

と、あまりにゴキブリを誉めそやすので、見ると、教授はゴキブリのヒゲのような数本のヒゲをふるわせながら言っていました。ところが、良切君はゴキブリが大きいらいなのでした。あの油ぎった体もいやですが、特に卵の入った殻が尻から突き出ているのを見ただけで、鳥はだが立つのでした。でも、相手は教授だから、

「ゴキブリはいやです。」

と言えば、どんな悪地悪をされるか分かったものではありません。それに、教授の言う事を良く聞いて、真面目に実験をして研究がうまくいけば、色々面倒をみてくれて、去年と違って今年が良い就職口を見付けてくれるかも知れない、とも思いました。ゴキブリへの賛辞を聞いているうちに、少し気分が悪くなって来たので、良切君はしばらくうつむいていました。そうして、ゴキブリにも心臓があるのだろうか、などと考えていたら、急に教授が大きな声でこう言いました。

「それじゃ、明日の午前中にゴキブリの飼育の仕方を教えよう。」

この一言で、良切君の卒業研究のテーマはゴキブリと決まってしまいました。一年間もゴキブリと付き合いなければならぬのかと思うと、とても憂うつでしたが、断われれば卒業できないだろうと思って、我慢する事にしました。帰る時、ドアを閉めながら教授の顔を見ると、それは何かに似ていると思いました。しばらく考えて、それはカナリアを食べて満足した猫の顔だった、と思い出しました。

次の日から良切君は、毎日ゴキブリの世話をしました。欠考教授の言った事のうち、一つだけは本当でした。確かにゴキブリは、ものすごい勢いで増えたのです。ネズミ算など問題ではありません。それこそ、ゴキブリ算で増えたのです。その中には逃げ出すのもいて、同じ階の他の講座どころか、上の階や下の階にまでゴキブリが広がり出したのです。欠考教授のような人は別ですが、だれだってゴキブリはきらいです。足元をはい回られただけでもゾッとすると、引出しを開けてゴキブリが飛び出したら、それこそ心臓に悪いのです。おまけにその中はフンだらけ、となれば、不衛生な事この上ありません。たまたま苦情が来るのも当然です。

仕方なく、良切君が教授に相談しても、

「ゴキブリは清潔だから、気にする方がおかしい。」

と、平気の平左で、まるでとり合ってくれません。良切君は、板ばさみになって困りましたが、教授がこんな態度では解決法がありません。ゴキブリを止めたくても、止める事も出来ません。こうして良切君が肩身の狭い思いをしているうちにも、たちまち部屋中ゴキブリで埋まりそうになりました。そのゴキブリも、一匹二匹だと大して臭わないのですが、たくさん集まっていると強烈な悪臭がするのです。それが一部屋を占領するほどの数なのだから、たまったものではありません。部屋に入る度に、良切君は卒倒しそうになりました。でも、なるべく思をしないうようにして、何とかゴキブリの世話をしました。欠考教授は、

「何事も学問のためだ。そのくらいの我慢出来ないようでは、学問の発展に貢献できないよ。」と言いました。しかし教授がゴキブリ部屋に入って来ることはありませんでした。教授は、学問の発展に貢献する気が無いのだろうか、良切君は思いました。

しかし何せ、去年学会の発表を聞いて思い付いただけのテーマですから、いつの間にか教授は、良切君に出したテーマを忘れてしまいました。今年も学会で、去年とは別のおもしろそうな発表を聞いたので、来年の四年生に今度は、ニクバエでやらそうか、それとも南京虫にしようかと、思い迷っていたからなのです。自分の出したテーマを忘れてしまったくらいだから、良切君が研究の進め方を相談に行っても、トンチンカンな返事しか帰って来ないのも当たり前です。実験の方法を聞いてその通りにやっても、うまく行ったためしがありませんでした。こんな事で卒業できるのだろうか、良切君は心配になって、教授に聞いてみたら、

「君は大丈夫、卒業出来るよ。」

と、受け合ってくれました。卒業研究がうまく行こうと行くまいと、教授がハンコを押しさえすれば卒業出来るのです。良切君はほんの少しばかり、釈然としませんでしたが、この一言で安心しました。

秋が近づいたころ、オオヨシキリの巣からは、一羽のカッコウが巣立ちました。しかし、良切君の卒業研究はうまく行かなかったのです。そこで、卒業は出来ることになったしと、見

たくもないゴキブリは皆片付けてせいせいしました。それからは、毎日のようにバードウォッチングに出かけました。良切君がほとんど大学に来て来なくても、欠考教授は何も言いませんでした。ほとんど良切君を忘れてさえいたのです。それでも、単位だけはくれたので卒業出来ました。しかし、やはり今年も欠考教授は、学生の就職口なぞ、まったく気にもかけていませんでした。教員試験に失敗してしまった良切君は、他に方法もコネもないので、もう一度来年の教員試験に期待して、アルバイトをしながら一年過ごす事にしたのです。

これが、金茶話大学の一人の四年生の、一年間でした。

この物語はフィクションであり、いかなる実在の団体、
個人とも、まったく関係ありません。

◎ ◎ ◎ ◎ ◎ ◎ ◎ ◎ ◎

<この原稿が会長室に置かれていた時、次のようないたずら書きが、書き加えられていました。どうも、続編のつもりようです。著者は不明ですが、なかなか面白いので、ここに再録しておきます。 会 長>

アルバイトをしながら教員試験合格を目指してがんばっている良切君は、夜もよく眠られないことが多かった。ガニマタの、ゴキブリが出てきて「セロックスの……」とおどかさずに、目をさまされることがあるからである。

たまには、新鮮なふん困気にふれなければと、良切君は寝不足の目をこすり、行きたくない抵抗する足をひきずって、山奥の金茶話大学を久々に訪れてみた。

オオヨシキリやコヨシキリが懸命にカッコウのひなを育てていたアシ原は見あたらず、そこはすっかり車におおわれていた。鳥のさえずりはなく、機械的な騒音がきかれるだけである。

あのカッコウの卵を暖めていたヨシキリは、どこで又カッコウのために使われているのだろうかと考えながら山を登っていくと、むこうから、背中をまるくした老人がつえをついてやっと歩いてくる。よく見ると、アノ欠考教授ではないか！

「先生！ 久しぶりです！」

欠考教授は、口をあげ、白くなって、そっぴらさっぱりすると思われるヒゲをさすりながら、

「君はだれだったかね」

「ゴキブリをやりました良切です」

「ゴキブリをやってもらったことがあったかね」

「……………」

「……………」

「ところで先生、どこか体のお工合でも？」

「いや、そのゴキブリのおかげだよ」

二人は、緑のなくなった岩山の上にこしかけて、車の排気ガスを通してい並ぶ自動車の屋根をながめながら話し出した。

「実は、最近の利学部は、働かないコンピュータとゴキブリだけになってなあ！ そのゴキブリが利学部を占領してしまって、コンピュータに住みついて働かないのが多くなった。勢いのよいのはゴキブリばかりになってしまったのだよ。

ある日、ゴキブリの山に足をとられてナ、とうとう酸酢の川にすべり落ちてしまってナ。三途の川のほとりには、オキナとウバの鬼がいて、亡者の衣を奪うと言われてる。大切な“教授”の衣を奪われては大変！と、あわてて逃げて来たんだ。何しろ教授の衣がないと、大学で偉そうな顔をして学生に、ゴキブリや南京虫の育て方を教えられんからな……………」

ゴキブリなんぞは育てなくてもどんどん育つし、南京虫だっていくらかでもふえる。ゴキブリまで管理しようとするから、ゴキブリにけ落されたり、遂には人間界でも長老排除とか言われるんじゃないか。

そんなバカバカしい話をウワのソラできいていると、足もとがサワめいているのに気がついた。

ゴキブリだ！

キラキラ光る身体に長いヒゲを二本うごかして、何百、何千という集団だ！

とうとう、この老欠考教授、フェロモンを発するようになったのか！

黒いや茶色のハネのやらが、キラキラ、ガサゴソ群がって「ゼロックスの代金は——」と合唱し出した。

ア—ア、又安眠を妨げられた。日は高く昇っているけど、良切君にとっては真夜中だったのだ。

<追記：この原稿の書体は、最近利学部、ではなかった、理学部で、教授に昇格されたある先生の筆跡に酷似しています。でも、当理学部では、教授はその人格・識見によって選ばれており、良くない友人がいるかどうかなど、交友関係まで調べるのだそうです。したがって、教授がこんな下品な文章を書くはずはなく、筆跡の酷似は何かの間違いであろうと、確信しております。 会長>

に こ り め 小 僧

(1) ユータ氏のパンチと会長の詞喝と

「小川雄太」2才4ヶ月。何だか姓と名が釣り合わないこの腕白は、僕のおいだが、腕白の反面、ぬいぐるみをだっこしては鏡の前でポーズをとり「かわいいでしょう」などと発するので、又の名をオカマユータちゃんともいう。妹（ユータ氏の母）の仕事の関係で週に3～4日は、わが家にきては、じいさん、ばあさんの遊び相手？となっているが、中流未滴のわが家計にとっては、少なからぬ脅威でもある。この坊生、どこで覚えてきたのか自分のことを「ユータ氏」と称し、「おかえりなさいーい」とか「いらっしやいませー」とか「ただいまー」など、わけもわからぬ覚えたてのわめき声とともにわが家にとび込んでくる。（最近、やっと「こんばんわー」を覚えた。）「母さんはこわいか」と聞くと「かあさん、こわいよ」と正直に答える。そのくせ、時のたつのも忘れて遊びに熱中している時、それを止めさせる奥の手は、妹の「ユータ、今日は、おじいちゃんとかへ、泊っていきな。母さん帰るから」の一声だ。この一声でもい泣き顔になり「ユータ氏も帰る」となる。いつも9時過ぎになるが、このくり返してわが家に平和な夜がくる。

そのユータ氏が、まだことばを覚えはじめのころ、顔を合わせるたびに、僕は「ウオー」とか「グアー」とかうなってあいさつがわりとしていた。他の人々とは違って、赤ん坊だからといって、愛想笑いもしてやらなかったから、今でもあまり好かれていないが、そのくせ、例の「ウオー」「グアー」といううなり声だけ、先に覚えてしまったので妹からひどくしかられたことがあった。それというのも、人の気配を感じると、「ウオー」とうなりだすので、近所の人々に体裁が悪いらしい。ある時などは、出前のおじさんの足音を聞いて、窓越しに「ウオー」とはじめたものだから、出前屋さんは本当の犬だと思ってびっくりしてしまった。その人は、運よく、太の犬ぎらいときたまんだから、妹は、ひや汗をかいたそうさ。まるで冗談のようなことがユータ氏の回りでは起きるのです。

そのユータ氏が正月早々、赤い目をしていた。小児科医の話だと「風邪」からきているとのこと。でも僕はどーもいやな予感がしていた。案の定、しばらくして電話があり、「はやり目」にかかっていたそうさ。妹にも移ったが、仕事の都合でどうしてもわが家に寄らなければ

ならないから「気をつけてねー」と一言。安気なものだ。それから数日後、ユータ氏の目は、ほとんどなおっていた様だったが、ちょっとしたスキに、ユータ氏の必殺パンチを顔面にくらってしまったのだ。もう直っているから大丈夫だと思いつつ、一まつの不安を懐いた数日後、朝起きると片目が開かない。といっても、朝はいつも起きたくないで、なかなか目が開かないから、その所為だと思ってみたりして、仕方なくもう一度試みたが、片目は開いても、その相棒がどうしても開いてくれない。一瞬、アッと思ったが、何せ「はやり目というものとまだ付き合いがなかったので、正体が判らないのだが、しかし、判らないなりに確信できた。しかも、その日は休日。医者もやっぱり休日だから、やむなく翌日まで待った。もしかしたら、あした目覚める時は、円なひとみがパッチリ開くのではと、心に思い込ませながら床についたのだが、何と、今度は両方とも開かないのだ。「ソー」。美しい話ではありませんが、夜のうちに、目脂が沢山でて、それが乾いて、長くて美しいまつげくだれの！？ — 会長>をくっつけてしまい、ついでに目ぶたもくっつけてしまうのです。仕方がないから眼力をこめて、やっとの思いで目を開け、鏡を見たら、目がまっ赤。涼しく、美しく澄んだわが目が、何とまっ赤に血走って濁っているではないか。僕は「ウサギ年」だが、赤い目ではなかった。血の気は淡いし、軟弱<これは異議なし — 会長>だから、カーッと目をむいたこともなければ、酒もだめだから、二日酔いで充血したこともない<徹夜で勉強すると充血するものですよ — 会長>。薄情だから、目が赤くなるまで涙を流したこともない。だから赤目の顔を見て、ビックリしたのです。まるで「怪人赤目ん相」ではないか。医者に、「これはやはりはやり目ですか」と聞いたら、「ソーですよ」と言ってくれた。いろいろ注意を受けた後、「仕事に行ってもいいですか」と聞いたら、「人に移りますよー」と言われ、「ダメなら診断書下さい」といったら、「ハイ」と、金1000円なりの1週間の欠勤証明書をくれた。それにしても、この窓口から、何人の人が移っていくのかなと思ったほど、とても、それらしい環境の医院だった。ともかく、いくら「風邪をひく」ことが得意な僕でも、1週間丸ごと病休を取るのは初めてなので、何だか胸がわくわくして、「上司」への電話では、思わず声はずんでしまった。

それにしても、ユータ氏の「はやり目」が移ったのは、(今のところ)妹と、僕だけだ。ユータ氏ともしっかり付き合いの深い人々をさし置いて、何で最も遠ざかっている僕に移ったのだろう。それは、ユータ氏だけが知っている秘密なんだろう。大きくなって、記憶力のいい子に育つ様な事があつたら、その辺のところを、じっくり追及してみたい。(でも、僕の方が、その事を忘れてしまいそうだが。)

学生の頃、僕は一応、生態講座にいたようだ。何もしたくなかったから、第6講座(そのころ、生物学科には5講座あった<今でもそうだよ — 会長>を設立して、何もしないでおこうと考えていたところ、別にそのまま生態にいても、何もしないで済みそうだったので、第6

講座は、考えてみただけで、すぐに立ち消えとなった。だからやはり生態講座なんだが、そうかといって、会長が僕の指導教官という事ではない。強いて言えば、非導教官といったところだろうか。しかし、僕は会長の非導に反し、今では、マジ目な、ホッ葉役人として、イジイジと仕事をやっている。いわば不肖の教え子（といっても、何も教えられなかったなア。＜コーヒーのいれ方、教えてやったではないか。ちっとも実習しようとしなかったけどー 会長＞何しろ、講義には出ないし、ゼミはなかったし）だが、僕の方も従って、これといって会長に義理があるわけではありません。ところが、これがそういうわけにもいかないのです。

実は、大方の友人の期待に反し、数年前に、人並み遅れて結婚したけど、事もあろうに人並みに近い結婚式までやるハメになってしまった。（何しろ、相手との力関係があるからね。）その時、ハタと気付いたら、仲人役がいなかった。当人どおしが、周囲の不安の声を押しきって勝手に決めたことだから、いなくて当然だけど、しかし、式をやるという事は、それなりのカッコをつける事だから、やはり役者がいます。付き合いの悪い僕にも幸い奇特定の友人がいたから、頭数は何とかなりそうだけど、肝心の仲人が見つからない。相手にまかせておいては、何者がやってくるかわからないから、何としても自分でみつきたい。そこで思いついたのが、何を隠そう、会長だったのです。（実は、以前、友人の結婚式で会長が仲人をやった時、「今度は君の番やなアー」と会長が言ったので、僕は、「いえ、とんでもない」と応えた覚えがあった。）会長とは、多少の付き合いもあったけど、何しろ仲人というからには、奥さんも要るわけです。奥さんの方とは全く面識がないから（しかも、あの会長も頭が上らない奥さんだと聞いていた）、とても心配だったが、しかし、ここは会長をおいて他にたのめる人がいなかった。前泊までしてもらって、今にして思えば、ずい分厚かましいお願をしてみました。従って僕は、会長に、というよりも奥さんの方に、大きな義理ができてしまったのです。（ついでに言えば、式の名簿の「ご媒酌人」のところをミスって「ご謀酌人」となっているのに直前に気づいて、あわてて印刷し直したのだった。何しろ知り合いの零細印刷屋さんだったので、わざとそうしたのかも知れないが。）

その大義ある奥さんの夫たる会長から、新年早々（もっとも年賀状だから新年早々だけけど）「フヤケておらず、何か書け」と恫喝された。そう言われても、僕は木葉役人であるけど、一応、組合の教宣担当なのです。4年に1度という一大イベントである市議会選挙を目前にひかえ、本当は忙しいところなのだ。＜4年間はヒマやったんやろうー 会長＞本業であるピラさえなかなか書けないのに、「何か書け」と言われても困る、と思ったりしていた。

ところがです。時を同じくして、突然「はやり目休暇」。はじめは、これで1週間のんびりできると思っていたが、さすが病気だけあって、目は痛いし、2時間毎に3種類の目薬をささなきゃならんし、何といっても「移り」気だから気を使うし、案外大変なのだ。おまけに、

カミさんが保険予防課勤めで、消毒をきびしく迫られ、いつも消毒液のにおいと、酒精綿入れを身につけてないとしかられる。僕も以前、仕事で伝染病の人を運んだり、彼らの弁当運びをやって、消毒は得意だったのだが、まさか自分の顔がそういう事態に陥ろうとは。何だかいつも、手洗いと消毒ばかりやっていて、自分の手と、首から上が自分から隔離されてしまって分裂したみたいだ。委員長から「休んでるうちに機関紙1回出せ」と、どやされたけど、とてもそんな元気が出ない。それでも、そうこうしているうちにやっと楽になってきた。ますます頭がフヤケてきた快さの中で、ふと会長の「惘鳴」を思い出した。「目は心の窓」とか言うけど、その目が赤く濁っているという事は当然、心も濁っているはず。心はどこにあるのかよく判らないけど、多分頭の中であって、きっと頭の中も濁っているはず。とすれば、生物学会誌に投稿するのは、この機会を除いてはありません。<どういう意味や！ ー 会長> 何しろ、いつもの澄んだ心と冷静な頭では、とてもおそれ多くて書けませんから。

(2) 反核レターのゆくえ —— 何だかよく判りませんね、伊藤先生 ——

「はやり目」の一番ひどかった頃、国営放送局地方版で興味をひく番組が放映された。

(1月17日。午後7:30~8:00、北陸東海「308号室からの手紙・反核レター一名古屋から世界へ」ディック・ミネと助教が始めた10万通の手紙 —— というすごいタイトル) 何せ、記憶力のない僕が、まっ赤に濁った目を通してイヤイヤ見ていた番組だから、正確な内容は伝えられない事を予め断っておきます。もしこの番組を見ていた人がいたら、誤りを訂正したり、補って下さい。が、ともかく、にがり目を通して感じた事をお伝えしましょう。数字や人名など、全く覚えてないので、最初から思いつきで書きますが、データにきびしい伊藤先生、ごめんなさい。でも、それと感想とは無関係であります。

話の要点は、多分こういう事だと思った。何かの機会に、歌手のディック・ミネさんが(多分、名大構内で)「現在のような核戦争の危機にさらされている時代に、自ら戦争を体験した者として、又、唯一の被爆国・日本に生きる者として、今こそ平和のため、反核のため、それぞれの立場で、自分でできる何かをやろう。政治家に任せておくのではなく、自分自身の手で何かを始めよう。例えば、何人かの人々に、自分の意思を伝え、反核を訴える手紙を出してはどうか」と、まあ、こんな主旨の訴えをされた。これを聞いた伊藤助教が大いに賛同し(ひょっとしたら、伊藤先生の方が先に提案したのかも知れないけど)、さっそく、実行した。反核のアピールを記し、海外の科学者に手紙を出した。そして、主旨に賛同するならば、自分で、自分の主張を記して、さらに何人かの学者に、自ら手紙を出し、続々に反核(レター)の輪を広げようと訴えた。こうして広がった各国の科学者からの手紙が、10万通になってきた、という報告だった。反核レターとは、その手紙そのもの、又はその運動の事のようなのだ。

これは、大変立派な行為である。このシラケ時代に、自ら反核運動に立ちあがる心意気に敬意を表します。

反核運動は、もちろん、わが組合でも大きなスローガンとして、掲げられてはいる。でも僕は何もやっていない。付き合い程度に「反原発新聞」をとったり（そういえば購読料滞納してるから、盗っているというべきか）、組合の署名をするだけだ。年に一度、平和大行進が、わが町を訪れた時、あの迫力ある「うちわ大鼓」の坊さんの後について、1日だけ歩くことも、ここ数年の年中行事だけと、これも、文字通り、年中行事の域を出ない。こんな不真面目な自分が、かくも立派な、テレビで取り上げられるような世界的運動に、あれこれ口をはさむのは、生意気だけと、やる事はやらなくても、言うことだけは、つい言うてしまうのが、悪いクセなのだ。<会長に教育された結果だ、と言いたいのやろ ー 会長。そうだったのか、そこまで気が付かなかった ー 著者>

308号室とは、決して病室とか、アパートの番号ではありません。どうやら伊藤助教授の研究室のようだ。そこには大きな世界地図が掛けてあって、集まってきた反核レターの数が国別に一目で判るように記してある。まるで生物の分布図みたいだ。何でも世界80数ヶ国、何万（10万かな）人にもものぼるといふ。地図に記してまず示すところが、いかにも先生らしい。そして学者らしいもったいぶった口調で、あれこれ解説する。何か、独り言のように、わざとらしく、フツフツつぶやいている。折角、マイクがセットしてあるのだから、もうちょっとわかり易く、はっきりとしゃべればいいのに、いかにもドキュメンタリー風に考えをめぐらせつつという図である。（その様子を見て、オヤジは、変った、おもしろい人だなアといった。）そして、例によって、きちんと整理されつつある、外国の反核レターが紹介される。その模範例が、これ又、先生らしく、ノーベル賞学者とか、ソ連のアカデミーの偉いさんのものであって、付き合いの広さの一端がうかがえた。そして、手紙が大写しになる。いったい何語かも判らない（タイプできれいに書かれていたが）、恐しい画面だった。しかし、先生は、ちゃんと読んでくれた。そして文末には、ちゃんとだれあてに輪を抜けたか、送信先の学者の名らしきものが記されている。要するに、あの「不幸の手紙」の様な方式で、まず1人が10人に出し、それぞれに又10人に出すように記しておくという事のくり返しの輪です。こちらは立派な事なので、ちゃんと署名してあるところが、大いにちがうところですが。どんな方法で、伊藤先生のもとへ集約されるのかは、忘れたけど、とにかく大変な量です。せまい研究室が埋まってしまうそうです。それを整理することは、大変な仕事だと思いました。

そして、テックさんがある時、308号室を訪れます。どうやら、初めての訪門の様だったけど、どうせ、初めから判っているのに、これまた、いかにもドキュメンタリー風に、カメラは追いかけます。そして、味気ない会話の出だしがこうです。「今日はカゼを引いてしましまして、（初対面なのに）ネクタイもしないで失礼します。」確か、こんな調子でした。どうしてネクタイがでたのかよく判りませんが、どうもピンとこなかった。何だか要領をえない、

とってつけた様な対面だった。

そして、いよいよ終演時刻が近づき、それでは、この運動をどうするのかという話になっていきます。そこら辺が、外野席には最も興味あるところだが、そこにきて、ますますよく判らなくなるのです。タイトルの「すごさ」に比して、伊藤先生のモゴモゴ調の難解さもあって、さらには、外国語が大写しになったりしたため、わが「にこり目」の限界がきて、段々とイヤ気がさしてきて、締めくくりが、どうもよく理解できなかつたですね。要するに、まずデータの整理をします。何ヶ国から何通の成果があり、反核レターの輪がどんどん広がっていく。内訳をみると、だれそれという著名人がいる。生化学者や、生態学者は、もう出つくして、今や、医学者や、人文学者にまで広がりがつある、と分析される。そして、伊藤先生自身、「前もって、この運動の締めくくりの仕方や、期限を定めてなかつたし、このような急速な広がりを予測できなかつたから、これからどうするのかを模索しているところである。このままでは、この輪（データ）は、際限なく広がり過ぎて收拾がつかなくなってしまうから、とりあえず「文通」はここらで終止符をうった方がよい。（どうしてだろうか？）<たしかに不思議だね 一会長> といって、世界の科学者のこの膨大な反核レターコレクション（またまたオヤジが、この先生は、世界の切手を集める趣味もあるのかなと感心していた）を、このまま眠らせておくわけにはいかない。どうやって有効に反核運動に結びつけるかで頭を傷めている。例えば、世界の一流の雑誌なんかにもこんなにも多くの科学者が反核の意思表示をしているよと転載する方法がいいかも知れない。又、この運動が、アメリカでなく、日本で起こったのが残念だ。何故なら、核の保有国は、日本ではなくアメリカだから、アメリカ合衆国に働きかけなければならない。残念だが、私は今のところアメリカに行く用事がないですから。（何かの学会でもあれば、ついでに済ませることができるといふ事かな）」——と、こんな様な結論めいた事を言われた。

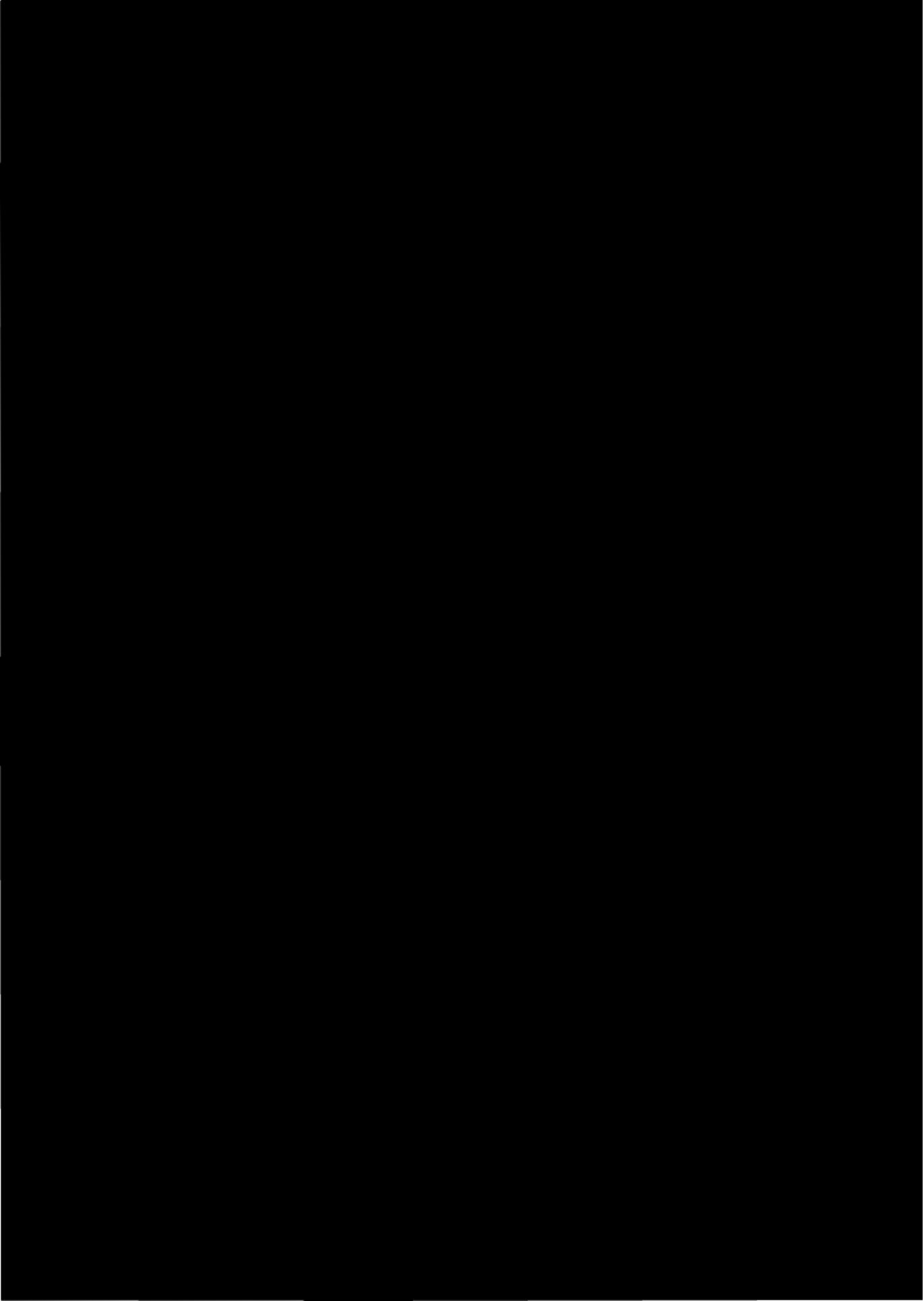
今後、どうこの運動を進めていくのかという、最後の部分が、どうもよく判らなかつた。何か変な気がした。それでもさすがに、最終的には、「今や、これだけ集まった世界の科学者の反核レターとその意思を、今後の運動にどうやって結びつけ、生かしていくのがか問題だ」と、当然の課題を、むずかしそうな顔で自問してみえた伊藤先生、どうかがんばって下さい。アメリカへも用事作って行って下さい。蛇足ながら、名大のプラズマ研究所が、岐阜県土岐市に建設されるようだけど、地元では反対運動も起きている。ご本尊の名大の問題施設が、なぜ、わざわざ、「よそ」に作られなければならないのか、その問題も、直接関係ないかも知れないけど、一言くらい触れるのかなあと思っていたけど、残念でした。これは、わざわざアメリカまで行かなくともすむことだから、何かやって下さいませ。

X X X X X

どうやら明日からは出勤できそうです。

約束の1週間がきたから医者にきいてみたら、「まだ、右目の方が少し残っているけど、人に移ることは多分ないでしょうから、仕事に行っていていいですよ」と言いました。それから、「しばらく通って下さい。慣れるまで目が疲れますよ」と言われた。出勤しても、どうせそんなに仕事はしないから目が疲れる事はないけど、いつになったら「多分」じゃなくなるのかな。この原稿を手にした会長は、ひょっとして、今ごろ、まっ赤な目になったりして。<残念でした。君のビールスで参るほど、ヤワな目は持ってないよ — 会長>

<追記> 伊藤嘉昭氏は最近、「不幸の手紙」の話を朝日新聞に書かれました。近代生態学者として世界的な業績をあげ、寝る間も惜しんで若い人の論文を校閲し、しかもその上こうした平和運動をされているのですから、まさに学者の鏡と申せましょう。会員の皆さんは、内心ジクジとしつつ、たまにはかかる真面目な文章も読んで下さい。ただ1つ、伊藤氏の欠点は、印刷が悪いのははっきりしますが、アゴにヒゲをたくわえていることです。もっともこれは金大生物学科にいないと判らないことです。



小 林 美 香

夕飯のしたくをしながらテレビを見ていた。「もっと！もっと！……努力！してネ、
“努力もち”ができました」と、N 清の「胸さわぎチャージャー」「純情コーン」「誘惑ベジタ
ブル」シリーズの CM だった。“努力”という言葉を聞くと、軟弱路線の私などはゾッと背筋
が寒くなる。

× × × × × × × ×

努力、といえは。高校野球には腹が立つ。努力も根性も汗も涙も、別に野球に限ったわけ
ではなく、体育系クラブ —— 中学・高校・大学を問わず —— 一般につきものだ。この体育
系クラブというもの、運動神経がニブくて入ることができなかったから、というのもあながち
間違っていないが、とにかく生理的にうけつけない。年が上ならそれだけでエライ（というこ
とにしておかななくてはいけない）、という人間関係がきらいなのだ。

やっぱり特に高校野球は許せない。なぜかは言わずもがなであろう。野球さえやっていれ
ば“これぞさわやか高校生”“これぞ青春”と、他は問われずにすんでいるからだ。私は高校
を卒業してはや6年になるが、現役時代は「近ごろの若者は×無主義だ」と、よく世間から
怒られていた。特に「無関心」と。しかし人間、すべてのことに無関心で生きていられるわけ
はなく、個人個人それぞれ、例えば音楽・ファッション・スポーツ・異性と関心は持っていた
はずだ。だから「無関心」と言われても、「違うもんねー」と、アッカンペーをしていたわけ
である。多分当時のおじさん・おばさんは「社会に対して」無関心だ、と言いたかったのであ
ろうが、それならば野球をやっているということだけで「なんていい子たちなんでしょ」とほ
めないでいただきたいかった。彼等も「なんて今の子って無関心なんでしょ」と言われる“今
の子”だったのだから。

私はいつと、高校時代は新聞をつくっていた。教師らの知らないうちに、札幌 —— 東京
—— 神戸というルートをつくりあげ、高校生新聞編集者全国会議なるものを開催した（既成のセ
クトとは一切関係ない）。当然公けに認められるものではなく、こっそりと参加せざるをえな
かった人間もいた（私もそうだった）。別に意図したわけでは全然ないのだが、その会議の初

日と春の選抜の開会式と同じ日で、「同じように好きなことやってるだけの高校生なのに、むこうは華々しく、こっちは日陰者なのよう」と、卑屈にはならなかったが、とにかくそう思ったことだけはよく覚えている。

そんな経験があるものだから、例えば明德の辞退問題が起こった時も、かわいそうとは思いませんでした。「夏をめざしてがんばります」と涙流して語るより、「オレたち悪くないんだから、辞退しなきゃなんない理由をキチンと述べよ」とかなんとか、だめでもともとツッパリゃいいのに。<1回やっただけで一生日陰者にされてしまうもんね——会長> 上から言われりゃ、本当は納得してないくせに「ハイ」とうなずいてしまうような日常を送ってるから、いざこんな目に会った時何もできないんだ、情けない、と私は思うのであった。

× × × × × × ×

ツッパリゃいいのに、といえは。話は中学時代へととんどん古くなる。ああ、あのころは若かった、っと。

私の通っていた中学は、札幌市内とはいっても、1学年3クラスしかない田舎中学だった。1年の時の校長がたいそう元気な人で（その年で停年退職だったにもかかわらず）、私の入学の前の年には「中学生らしさって制服でしょうかねえ」などと考えてしまったらしく、“制服自由化テスト期間”を設け、PTAとも話し合ったそう。結局はポシャってしまったが。それでも、そういう校長だったので、帽子はかぶってもかぶらなくてもよろしい 上着は着ても着なくてもよろしい・中に何を着てもかまわない、と他の中学から比較するとかなり自由な服装が許されていた。もちろん頭髪・くつ・かばんも自由である。つまり、男子は学生服のズボンさえ、女子はベストとスカートさえ着ていれば、あとはどんな恰好でもよかったというわけだ。

ところがその校長が退職して次に来たのが堅物だった（もしかしたら、あれが“普通の校長”の姿だったのかもしれない）。私達の学年までは、今から厳しくすると何かと面倒くさいと考えたのが、新入生のみに着帽・白シャツを義務づけ、髪も「あれはよいが、これはだめ」くつもかばんも指定、etc と、「中学生らしく」を理由に規制しはじめたのである。<学費値上げは新入生から、というのが、反動的文部省のやり方であるが、最近、新入生の出資金の増額を現役の学生が決めるという、“民主的”大学生協もあるよ——会長> 私たちは単純に思った。「私たち、どんな恰好をしてもやっぱり中学生だし——“らしさ”って何?」「どうして私たちだけ今までどおりでよくって、1年生だけだめなの?」と。ここからが明德野球部員と違うところである。<さる大学の民主的教官や学生とも違うね——会長> 校長室に押しかけて「説明して下さい」。あけくには全校集会みたいなものをわざわざ開かせ、“団交”しちゃったのであった。今から思うと、やった自分たちにも、黙って許してくれてい

た教師たちにもおそれいる。

× × × × × × ×

教師、といえ、また中学の時の話である。高校に入ってしまうと、教師はおぞましい存在以外のなにものでもなくなっていたので。

社会と理科を担当していた T 先生(社会と理科、2教科受け持ちというのが、いかにも田舎中学らしくてよい)。専門は地理だったようだが、まず社会科の授業の話をしたい。なつかしいひびきだ、グループ学習。班ごとに OHP を使いながら(この手の視覚授業の流行り始めだったと思う)発表して、それから討議に入る。班で話し合っていてわからなかったら、次はクラスで話し合う。それでもわからなかった場合、ようやく T 先生の登場とあいなった。が、「中国人は人民服を着てるのに、どうしてソ連の人は着ないんですか」みたいな、おいそれと答えが出るような質問じゃなかったりして、T 先生の必要性はないようなものだった。〈ソ連には“人民”がないので着れないんだ、という答ではいけませんか —— 会長〉しかし私はこの社会科の授業で、話し合うことのおもしろさを教えてもらったように思う。

それよりも、T 先生に教わってよかった、と自信を持って言えるのが、理科の授業であった。おこがましい言い方かもしれないが、T 先生の理科の授業で私は「学ぶこと・考えることのおもしろさ」を知った。〈それを知らない大学生が増えてきてね。日夜苦勞しています —— 会長〉書いていてやっぱり恥ずかしくなった。なんかものすごく勉学に燃えているみたいだものね。〈そんなこと思わないよ —— 会長〉とにかく。まず自分は何を知りたいのかを知り、どうしたらそれを解くことができるのか、その方法を考え、調べるなり実験するなりしてみる。そしてそれを自分で分析してみる —— その過程がおもしろいんだぞ、覚えるんじゃないぞ、考えることがおもしろいんだぞ。直接言葉で教えてくれたわけではないが、私はそのことを教わったのである。どうやって教えてくれたかというと、「予習禁止・授業中教科書持ち込み禁止」、これでだ。「結論がわかっているものの実験したり、話を聞いてもあんまりおもしろくないでしょ」と、T 先生は言った。〈結論のわかりない研究しても、論文は書けないよ、と欠考教授は言った〉

受験戦争がはげしくなかった昔だったからできたんだ、と言うなかれ。たった10年前の話なのだから。でも10年ひと昔か。

× × × × × × ×

教科書、といえ、現在進行形ではあるのだが、教科書論争。やれ「侵略だ」「進出だ」やれ「右傾化だ」「左傾化だ」と。まじめな人からは怒られるだろうが、どっちにころぼうともつまらない教科書ならいらぬ、知識を、単語を覚えるためだけの教科書ならいらぬ、と私は思っている。

みんな似たりよったりだと思うが（と、記憶力のにぶい自分を無理に肯定する）、教科書の中でいまだに覚えているものが、それほどあるだろうか。 <ジジム・スイセイ・アンネイ・イトク・……・メイジ・タイショウ、チンオモフニ ワガコウソコウソウ……ケンケン フクヨウスルコトヲコイネガフ、天祐ヲ保有シ万世一系ノ皇祖ヲ踏メル大日本帝国天皇ハココニアメリカオヨヒイギリスニ対シ戦宣ヲ普告ス。よう知ってるやろ。もっと言うたろか —— 会長> 私など「あのプラナリアはかわいかったなあ」程度のものである。人間、自分にとってつまらないもの、必要でなさそうなものは、どんどん忘れ去っていくようにできているものだ。 <オレは天才かな —— 会長> 教科書論争で焦点となっているのは丸暗記教科とされている社会科だが、よしんば内容を覚えていたにしろ、それが今生きていく上でなんらかの糧となっているか。たとえば「安保闘争」「南京大虐殺」、これらを覚えていたにしろ、それはただことばとして覚えているにすぎない。日本に原発が何基あるのか知っていたにせよ、自分がそれをどう考えるのかがなければ、なんにもならない。

ようするに、考えるものとしてではなく、覚えるべきものである限り、教科書なんでものは記載内容がどうであろうと、子供に「勉強はつまらない」「学校はつまらない」と感じさせるものでしかない、と言いたいのだ。序列をつけるための知識に、子供がそっぽを向くのは当然で、そこには「右傾化」も「左傾化」も関係はない。ただ誤解してほしくないのだが、私は「だから文部省が何をやってもよい」と言っているのではない。あまりにも教科書が聖典扱いされすぎているのが怖いのである。 <誤解してほじいのだが、歴代天皇の名前を覚えているよりも、南京大虐殺の事案を覚えている方がよいと思うよ —— 会長>

教科書から生きることを学んだ、という人がいるか。教科書が愛読書という人がいるか。

× × × × × × ×

愛読書といえば。吉田秋生はよい。

丹 後 支 部 長

丹後支部を開設してはや2年がすぎた。当初の予定では、支部員を拡大し、東京支部に続いて独自の学会誌を出すはずであったのだが、まだ1人の支部員もできぬうちに、私がうつ病をわずらい、さらに自閉症へと発展したので、<前から自閉症やったやないか —— 会長> 計画はまるでダメになってしまった。しかし、ここに丹後支部長の生存していることだけでも知らせたいと思う。<死んだら死亡広告を出すから、心配なくていい —— 会長>

丹後には、私が来て以来、ろくなことが起こっていない。前回紹介したエネルギー研究所（実は火力発電所）の建設は正式決定し、久美浜原発は地質調査が実施され、唯一の私鉄は廃線となり、国鉄は61年度廃止路線にリストアップされた。多くの労働人口を都市へと吸収しつつけた古いパイプは今や用がなくなり、新たに火電や原発というやっかいものがおしつけられようとしている。ある経済学者によると、「資本主義とは異なった価値体系間を資本が媒介することによって、利潤を引きだしながら、その差異を解消し一つの価値体系の中へ再編成してしまう社会的な力である」という。今やこの地方においても一つの解体が完了し、新たな再編成が始められようとしているのかもしれない。つまり、労働力を吸いとり、製品を売りつけるというのが今までの収奪であるとすれば、その結果である過疎そのものが新たな差異として利用されようとしているのではないか。<いつの間に、経済学の勉強までしたんや。うつ病の間か。オレもうつ病になろうかな —— 会長> とすれば、この再編成の末には過疎が解消されるのであろうか。原発や火電建設の名目として、過疎解消が語られていることからして、その可能性は絶望であると私は思う。彼らの口にするだけで、一つでも望ましい形での実現などあったためしがないから。<やはり、学問的ではなくて経験的だね。安心した —— 会長> おそらくありうるのは、残された自然と共同体の壊滅であろう。我々は、毒物を吸収し、金と時間にしばられて暮すことにおいて都会人並みになれることだろう。

さらに学校において（これは丹後に限らず府下全域であるが）、制度改革が行なわれ、高校教育の三原則（共学、総合性、小学区制）が切りくずされた。つまり、進学コースや体育・芸術系コースなどが設けられ、生徒の隔離・均一化が進んだ。もちろん組合側はこの改革に反対し、討議が重ねられたけれど、私にはとても本当の対立があったとは思えない。結局言っていることは、まるで同じなのだ。生徒の教育・管理に熱心な点でも、教師集団の一致を重んじ

る点でも。

教師のような平凡・小心な人間が、まじめに討論して出来上った民主的運営こそ、どんな独裁的運営以上に耐えがたいものになるような気がする。<金大生物学科の教授独裁の方が、まだましかな —— 会長> 我々は、どのような形であれ集団というものを作って何かを進めようとした時、すでに最終的には（対立するはずであった）体制を支えてしまう結果になる運命にあるらしい。<変な“色気”を持つからそうなるのではないかな —— 会長>

生徒の方とはといえば、相変わらず無関心・無気力で、ほとんど無抵抗である。しかし彼らは、実に巧みにヌケガラだけを従順そうに教師の前に残して、本体は教師のおよぼぬところへのがれる術を身につけている。<教師に“本体”などつかまえられたら困るもんね —— 小林美香> 無味乾燥な授業に対して、こんな勉強が何になるかと問いかけたりしない。<教師は感謝しなくてはならない —— 会長> どう言いつくろってみても、学校の勉強か（評価にむすびついて）現実的な利害と無縁のものであり得ないのなら、そんなところで考える力や創造力を問われたりするよりも、暗記の成果を競い合う方がましだと思っているのではないかな。独創性とか個性とかが、何か純粋なもののように持ち上げられてきたけれど、実に巧利的・現実的なものであることがみえてしまって、むしろ既成のもので仮の自分を演出しつづける生き方を選んでいるようにも思える。ともかく彼らは、現実につながれて現実の中にしか価値の見い出せない大人には、想像もつかない異世界の方をこそ、充実して生きていくと考えることにしよう。そうすれば、彼らはこんなふうに語りたがっているように思えてくる。“今、ここが私の国です。あなた方には、あなた方の国へ帰ってほしい。”

それは、管理したがる人達に対してであると同時に、生き生きとした授業だとか、語り合いわかり合える集団形成だとかをしたがる人達に対しても向けられているのだろう。<貴方に対してはどうなの？ —— 富家>

— 魚 から 人 間 ま で の 歴 史 —

奥 野 良 之 助

第2章 あらかじめ心得おくべき若干の知識 (続)

7. せきつい動物とは何か (続)

4月にはいると、金沢の桜はほころびはじめる。旧金沢城の石川門、現金沢大学の正門の前には桜並木があって、毎年4月10日、希望に胸をふくらませた新入生たちが、満開の桜の下をくぐって登校してくる。そして、桜が散り、青葉がもえる季節になると、その胸はしばみ5月病が多発する。その原因は、講義を聞いたからである。

4月は、すでに学部へ進級した4年生や、新しく入院した院生たちにとっても、卒業論文や修士論文のための研究を始める、大切な時期である。自分の研究テーマは自分で決める、教官は黙っておれ、と、学生にあるまじきことを言って、学生が荒れ狂ったのは、ほんの10年ほど前の事であった。現在の学生は、学生の本分を充分理解し、自ら教授のもとに出頭して、教授のテーマをうやうやしくいただくようになった。時には、ワシはこれやるんや、と子供みたいにダダをこねる学生も、いなくはないがごく少ない。自分のやりたい事をかくして、教授からもらったテーマで研究する学生の末路は、本号所載の「カッコウとヨシキリ」に詳しいが、これはほぼ実態であると理解していただいで間違いはない。その最後に、「この物語はフィクションであり、いかなる実在の団体、個人とも、まったく関係ありません」と書いてあるが、わざわざそう書いたところが怪しいのである。

さて、金茶話大学、ではなかった、金沢大学の“理”学部生物学科では、この4月、ある講座に沢山の4年生が集中した。この講座は例年2~3人しか来なかったのに、何と12~3人が希望した。他の講座の教授から文句が出て、結局は6人となった。当講座の教授はその6人を集め、テーマを提示したのだが、それが何と4つしかなかったのである。

卒論や修論の学生に自分の研究の一部をやらせるのが、大学教授が業績をかせぐ、ほとん

ど唯一の方法である。だから、学生が沢山来れば来るほど沢山論文が書け、教授にとってこれほど良い事はない。しかるに、6人も来たのに4つしかテーマを出さないなどという事は、どうにも信じられない。みすみす6つ書ける論文を4つでよいというのだから。不思議な現象が起こった時、その不思議を解き明かすのが、科学者の任務である。我々教授以外の教官、すなわち非教授は、この不思議を解明すべく討論した。「4つしかテーマを考えつかなかったのちがうか」「それは“教授”に対して少々失礼な見解と思うがね」結局、4つ以上の数が数えられないのだろう、という結論になった。

さて、前回、せきつい動物は8つの綱に分けられるという話をした。8は4の2倍だから当然数えられない。といって、無理に無理を重ねて8つに減らしたのだから、これ以上綱をまとめることは出来そうにない。そういう時どうするかというと、門と綱の間に、もうひとつ分類群をつくれればよいのである。これを“上綱”という。つまり、せきつい動物の8綱を2つの上綱にまとめればよい。

現在、分類学者が採用している上綱の分け方は3つある。第1は、アゴを持つか持たないかで、無ガク上綱（無学上綱ではない）とガク口上綱に分ける、第2は、ヒレを持って水中に住むか、足を持って陸上に住むかで、魚形上綱と四足上綱に分ける、そして第3は、水中に裸の卵を生むか、陸上に殻つきの卵を生むかで、無羊膜上綱と羊膜上綱に分ける、この3つである。

学者がこうして分ける以上、そこには正当かつ十分な理由が存在することになっている。それを、これから事細かに説明して行こう。編集後記にあるとおり、本号から8ページ増えている。いくら長く書いてもページ数はたっぷりあるし、ちょうど私は、最近教育意欲が久しぶりに猛然とわき上って来たところだから、読者の迷惑などがまっている暇はない。

(1) アゴの有無による上綱の分類

無ガク上綱

無ガク綱

ガク口上綱

板皮魚綱

軟骨魚綱

硬骨魚綱

両生綱

ハ虫綱

鳥綱

ホ乳綱

たかがアゴのあるなしで、なぜこのように分けるのかと、不思議に思う人は、自分のアゴがはずれた場合のことを考えてみるとよい。アゴがなければかむことが出来ず、すべて流動食となって、おカユのきらいな人は生きていく意欲を失なう。その上、しゃべる事も出来なくな

り、舌先三寸で世を渡っている、だれかのような人は、もはや生きては行けなくなろう。食物をかみ、人にかみつくという、最も人間らしい行為の2つともが、アゴの厄介になっているのである。

では、アゴのまだなかった、古代の無ガク綱、甲皮魚はどうして生きていたのか。彼らは水底で泥を水と共にすいこみ、エラでこしわけて、有機物をとりこむという、ただそれだけの生活に甘んじていた。すぐそばに、おいしそうなエビが歩いていても、食べることは出来なかったのである。いや、もっとおいしいものを食べたいというような、“向上心”のかけらも、持ち合わせていなかったにちがいない。こうして彼らは、およそ2億年もの間、せいぜい30センチほどのケチな魚以上のものにはなれなかった。まさに、無気力、無能力にウロコをかぶせたような生き物であった。

さて、その中のあるものが、ふとしたことからアゴを発明した。近くのエラ骨を少々強化し、歯を生やしたただけなのだが、ただこれだけのことで、おとなしく無気力な甲皮魚は、活発で凶暴な板皮魚に変身したのである。アゴはどうやら、ジキル博士をハイド氏に変える薬と同じ効力を持っていたらしい。

アゴを持つと、まず、食べ物の範囲が広がる。おいしそうなエビやカニ —— 当時にもいたものとして —— を見ても、もはや遠慮することはない。同じ仲間の他の魚だって、食おうと思えば食べられる。彼らはよりよき食生活にあこがれるようになり、せきつい動物は初めて向上心を抱いた。こうして、はてしのない進化と、同時にかしゃくなき競争が始まることになる。

もっとも、食べられる方も、おとなしく待っているわけではない。当然逃げる。逃げる獲物は追わねばならぬ。デンキウナギを含むナイフ・フィッシュという魚は、前にも後にも泳ぐという特技を持っているが、魚はふつう、前へ泳ぐことになっている。だから、目や鼻は、頭につけておいた方が、獲物を見つけやすい。かくて、感覚器官の頭部集中なる現象がおこる。獲物を追いつめるには筋肉を発達させねばならぬ。その筋肉を動かすには、骨格を丈夫にしなければならぬ。さらに、追いつめたあとはかみつく訳だが、アゴを開める力が弱ければ逃げられる。アゴの筋肉は、頭の両側に付いていて、下アゴをひっぱり上げるというしかけになっているのだが、頭骨が小さいと筋肉は発達できない。ゴリラの頭骨のてっぺんには、大きなツイ立てのようなものが立っていて、これを矢(し)状隆起と呼ぶが、これはその強大なアゴの筋肉を付着させるために発達したのである。人間にはこれはない。だから、かむ力はゴリラより弱い。そのかわり、下アゴの先、つまりおとがいが伸びている。ここに舌を動かす筋肉が付くようになって、言葉をしゃべる時の複雑微妙な舌の動きを可能にする。ゴリラは頭のてっぺんでかみつき、人間はアゴの先でかみ合っているという訳である。

下アゴの筋肉の発達は、必然的に頭骨の肥大をうながす。頭骨はいうまでもなく、脳の入
れ物である。大きなサイフを用意しても、必ずしも中身のお金が増える訳ではなく、かつて私
のある友人は、サイフを買うと中に入れるものがなくなるという矛盾に悩んでいたことがあ
ったが、両者はかくの如く反比例の関係にあることも多い。たとえば、校舎を大きく立派にすれ
ばするほど、その中で行なわれる研究が貧弱になるといった大学の例もある。尾頭つきの魚の
煮物が出たら、その頭骨を開けてみられるとよい。魚の脳は、大きな頭ガイ骨の中にちょこん
とはいつている。ただし、脳が頭ガイ骨より大きくなることは出来ないという事もまた、真理
である。

目や鼻などの感覚器官、筋肉という運動器官が、獲物を追いつめ敵から逃げるために大い
に発達しても、それらを統括する脳が小さくては、それこそ宝の持ち腐れである。アゴの筋肉
はあらかじめこの事を予想し、脳の入れ物、頭骨を大きくしておいたのであった。

せきつい動物にとって、アゴの発明がいかに重要な事であったか、おわかりいただけた事
と思う。アゴを得て、せきつい動物は、受動的でおとなしい生き物から、能動的で凶暴な生き
物へ生まれ変わった。初めてアゴを得たせきつい動物である板皮魚の中には、全長10メートル
に達する怪魚さえ現われた。もっとも、それが良かったか悪かったかは、全然別の話である。

かくて、現在、多くの分類学者がこの分け方を採用し、たいていの教科書には、無ガク上
綱・ガク上綱となっている。いまは亡き松原喜代松大先生も、この分け方を採用されていた。
ある日のこと、松原先生が私のいた水族館を訪門された。直接の弟子ではないが知らぬ仲では
ないので、私が案内の役を買って出たのだが、相手は魚類分類学の大家、全部説明してもら
ったので、大変楽であった。当時、ちょうど、円口類のヌタウナギを飼育していたが、それを見
るなり先生は、「これがサカナではないサカナですよ」と、説明に熱がはいった。私は一瞬に
してその言葉の意味を理解したが、皆さんにはおそらく分からないであろう。そこで、説明を
試みることにしよう。

もともとは、水中に住み、魚の形をしたせきつい動物を、すべて魚、ラテン語でいうとピ
スケス、としていた。学問が進歩し、魚の分類もこまかくなるにつれて、このピスケスがいく
つにも分けられた。でも、それをすべて集めたものをピスケスということにしておけば、魚と
いう名は残ったのであるが、せきつい動物を無ガク上綱とガク上綱に分けたことで、ピスケ
スという分類上の単位は消失したことになる。それはよいとして、問題は、タイやマグロがラ
イオンやキリンとガク上綱に一括され、ヤツメウナギやヌタウナギの無ガク上綱と別にされ
た所にある。もし、ヌタウナギを魚と呼べば、ヌタウナギよりもタイに“近縁”なライオンも
また、“魚”と呼ばねばならないではないか。いくら何でも、ライオンを魚と言う訳にはいく
まい。そこで、ヌタウナギは魚ではないことにせざるを得ないのである。とはいえ、ヌタが付
いているといっても、ウナギは古来から魚である。この矛盾をアウフヘーベンしたのが、「サ

カナでないサカナ」という、松原大先生の名言であった。学問の世界というものは、言葉一つ一つにこれほど深い内容を含む、底知れない世界なのである。

アゴの発明が、せきつい動物の進化の上で、非常な重要性を持つという点に関しては異存はない。ただ、そうすると、ヌタの付いたウナギは魚と呼べなくなるし、現生のものに限ると、無カク上綱には円口類つまりヤツメウナギとメクラウナギ計50種余りが属するだけで、他のすべての魚（約2万種）、両生類（約3千種）、は虫類（約6千種）、鳥類（約8千6百種）、ほ乳類（約6千種）は全部、カク口上綱にはいってしまう。つまり、常識はずれのアンバランスな分類体系である。

(2) ヒレと足による上綱の分類

魚形上綱	四足上綱
無カク綱	両生綱
板皮魚綱	ハ虫綱
軟骨魚綱	鳥綱
硬骨魚綱	ホ乳綱

一見して判るように、これはまことにバランスのとれた分類である。しかも、魚形は水中に、四足は陸上に住み、常識とも矛盾しない。問題は、魚がヒレを足に変えて陸に上ったことが、せきつい動物の進化史上、アゴの発明に匹敵するほどの大事件であったのかどうか、という事である。

魚は、3億年前に上陸して両生類になった。その時、水中に残った魚の方は、現在までの3億年の間に、それなりに努力はしたが、せいぜい現代の魚にしかなれなかった。ところが、両生類の方は、同じ3億年の間に、遂にホ乳類を生み出した。なぜ、これだけの差が生じたのか。それは、ヒレを足に変えて陸に上ったからである。もし、せきつい動物が陸に上らなければ、いまだに魚しかおらず、タイオウイカやミスダコに馬鹿にされているにちがいない。アゴは確かに、せきつい動物を能動的で積極的な動物にした。しかし、せきつい動物がその真価を発揮するためには、発達した脳を必要とする。それには陸上に上る事が必要だったのである。

水中の魚が、3億年もかかって、なぜ脳を発達させなかったかという事は不思議である。もうちょっと頭のいい魚が少しくらいいてもよいと思うのだが、どれもこれも似たりよったりで、全くいない。これは、私の思うに、大量の酸素を消費する大きな脳を、水中に溶けこんでいるわずかな酸素では、まかないきれないからであろう。陸生動物が肺でとりこむ空気中の酸素と同量を、エラで水から得ようとする、重さにして10万倍の水をエラに通さねばならぬと、ある本に書いてあった。これでは、かりに大きな脳を持ったとしても、酸素不足で絶えずもうろうとしているにちがいない。陸上にいても、私など最近よくそういう状態におち入るので、そういう魚はさぞ辛い事だろうと同情できる。もっとも、私のもうろうは、別に酸素不足

が原因ではない。

(3) 羊膜卵による上綱の分類

無羊膜上綱

無ガク綱
板皮魚綱
軟骨魚綱
硬骨魚綱
両生綱

羊膜上綱

ハ虫綱
鳥綱
ホ乳綱

せきつい動物の上陸が大事件であることは認めよう。しかし、初めて陸に上った両生類が眞の陸生動物であるという事は認め難い。確かに足は持っているが、彼らは、その名の示す通り、水と陸とを往復している“両生”動物にすぎないではないか。その点、ハ虫類は、ほとんど水にもとることなく、内陸深く進軍し、かの恐龍帝国を築き上げた。眞の陸生せきつい動物は、ハ虫類をもって始まる。という考えの学者の分類法がこれである。

陸生動物としての両生類の泣き所は、その卵をどうしても水の中に産まねばならぬ事である。ジエリー質につつまれているとはいえ、彼らの卵は、魚の卵と同じく、“裸”であって、空気中ではたちまち干からびてしまう。ハ虫類はこの点に目をつけた。そして、空気中でも乾かない卵を発明した。それが「羊膜卵」である。といっても、別に難しく考えなくともよい。我々が毎日食べているニワトリの卵が、羊膜卵である。

発生を始めるとすぐ、羊膜と称する薄い膜が伸びて、自分自身をつつみこむ。その中に水がたまって、子供はその水につかたまま発育していく。つまり、自家製のプールの中で乾かす育つのである。発育の栄養は、大きな卵黄からとりこむ。ただし、その残りかすを排せつするのには注意がいる。小さなプールであまり不謹慎なことをしていると、自分の排せつ物で自分が中毒することになる。そこで、もうひとつ袋をつくって、そこへ排せつ物をためておく。これが尿膜である。そして、全部をかたい殻でおおうと、羊膜卵が出来上がる。

こんなややこしいものを、彼らはどうして発明したのか、と思うが、実際にあるのだから仕方がない。羊膜卵の起原を説き明した人は、これまでにいない。毎日何気なく食べている卵だが、その中には大きなナゾが含まれている。齢をとるにつれて自分自身がわからなくなってくるが、その原因は卵を食べている所にあるのではなからうか。

さて、公式に提案されている上綱の区分は、これらの3つである。しかし、この程度の理由づけでよいのなら、まだほかにも考えられる。たとえば、体内の温度を一定に保つ恒温性は、外界の気温の変化に左右されず、夏でも冬でも、熱帯でも北極でも、いつでも活動できるという点で、偉大なる進歩である。そこで、せきつい動物を、変温動物と恒温動物の2つに分けま

う、などと言っても差支えない。八虫綱までを変温上綱に、鳥綱と哺乳綱を恒温上綱に入れる訳である。もっとも、最近、中生代の空飛ぶ恐龍、翼龍が、恒温性であったという証拠が見つかっている。だから、翼龍は恒温上綱に入れなければならぬが、さりとて鳥とも哺乳類とも言い難い。すると、翼龍綱をつくらねばならぬ事になるが、それでは綱の数をなるべく減らすという大原則に反する。だから、積極的に主張するつもりはない。

もうひとつは、卵生と胎生で分けて、鳥綱までを卵生上綱に、哺乳綱だけを胎生上綱に分ける方法である。これは、哺乳類の胎生・哺乳こそ、せきつい動物進化の上での最大の事件であるという見解であるが、珍しくくわしい話は省略するが、実はこれがいちばん正当な考えではないかと、私は秘かに思っている。その理由は、哺乳類の起原のところで書くつもりだが、当分先の話だから、そのころにはまた考えを改めているかも知れない。改める前にあの世へ行って書けなくなっていることもあり得る。ともかく、私が秘かに思うほど、それは大事件なのである。ちっとも証明になっていないが。

という訳で、いずれの分け方にもそれぞれ必要にして充分な理由があり、優劣にはわかに決められない。こういう時にはどうすればいいのか。それは、初心にもどればよいのである。アメリカ・インディアンの反抗に手を焼いた合州国政府が、ではどうすればよいのだ、と聞いたところ、「私たちの要求は、正当かつささやかなものである。私たちが大古の昔から所有してきた土地を返してくれさえすればよい」と答えられ、事態があまりにも明白になりすぎて困ってしまったという話がある。ところで、なぜせきつい動物を2つの上綱に分けるかというところ、綱が8つもあっては数えられないからであった。いくつまでなら数えられるかといえば、4つまでであった。こうなれば、結論はただひとつ、8つの綱を4つづつに分けた、魚形上綱と四足上綱をとる以外にない。他の分け方はどれをとっても、1つの上綱に5つ以上の綱がはいってしまうではないか。

ただし、まだ話は終わった訳ではない。こうして、2群にわけた8つの綱を並べると、せきつい動物はこの順番に進化してきたと思われるだろうが、そうはいかない。まず、無ガク綱がいちばん初めにおかれているのは、その主要な部分を占める甲皮魚が、化石の上で最も早く現われた、つまり、これより古きせきつい動物は、少なくとも現在見つかっている化石の上では、いないという意味である。今後また変な化石が見つかって、第1の席から下ろされるかも知れないが、まあこれは妥当なところであろう。

この甲皮魚のあるものから、次の板皮魚綱が生まれてくる。ただし、現在見つかっている甲皮魚はすべて、相当に特殊化したものばかりであって、アゴを発明するといった大それた事をやりそうな奴は見当らない。つまり、今見つかっている甲皮魚のどれからも、次の板皮魚が生まれてきてはいないのである。ただ、板皮魚の前には甲皮魚しかなかったという、やむを

ら現代へかけて、空に鳥綱、陸に哺乳綱が繁栄する。ただし海は古生代以来硬骨魚綱が支配し続けている。

以上が、せきつい動物の歴史のあらましであって、おそらくこれだけでも憶えられないと思うが、しかしこれは、「あらかじめ心得おくべき若干の知識」に過ぎず、これからいよいよ本論が始まるのである。

※※※ おわびと訂正 ※※※

本誌前号（第19号）の“広告”のページで、「正露丸」の製造元を「大ホウ素品」と書きましたが、これは著者のまったくの感違いで、「大幸素品」の誤りでした。おわびと共に、19号683ページの1～7行を削除して、訂正します。

日本生物学会会長

<< 編集局だより >>

その1 会長と編集局長補佐の会話

補佐「こんにちは、会長。」

会長「お、久しぶりやな。しばらく顔見せんかったけど、何してたんや。」

補佐「ええ、実はちょっと旅行に行ってたもんで。」

会長「ええ身分やな。こっちは毎日出勤しとるのに。それでどこへ行ってたんや。まあ、コーヒーでもどうぞ。」

補佐「ああ、どうも。」

(実は、部屋に入る前から香りが漂っていて、コーヒーが入ったばかりだということを知っていたのだが、さりげなく言った。そして、)

補佐「実は、パナマまでちょっと。」

会長「パナマ!? 何しに行ったんや、そんな所まで。」

補佐「色々とね。ナマケモノ氏にも会ってきましたよ。本名はミツユビナマケモノというんですが。」

会長「あいつはパナマにおったんか。道理で原稿送ってきた時、けったいな切手がはってあったな。」

補佐「生物学会誌も国際的になりましたね。外国から投稿が来るんですからね。」

会長「今や、国内一流学会誌から、国際的一流学会誌に昇格したんや。君なんか、表紙が薄っぺらやから中味も薄っぺらやと思うてたんやろ。少しは見なおしたか。」

補佐「外国からひとつ来たからいうて、それほど威張ることもないでしょう。それより、ナマケモノ氏は怒ってましたよ。後ろに変なもの付けたでしよ、あれをね。」

会長「本文を書きなおしたわけじゃなし、あれくらいかまわんやろ。」

補佐「あれ書いたのは教授でしよ。」

会長「確証はないが、どうもそうらしい」

補佐「ナマケモノ氏はね、教授というのはナマケモノ的でない、と言うんですよ。彼らの社会で非ナマケモノ的というのはね、人間の社会で言えばね、非人間的、つまり赤ん坊をコインロッカーへ捨てるとか、教授が助手を自殺させて自慢するとか、そんな事を言うんです。」

会長「そういえば、金沢の近くでそんな事あったなあ。」

補佐「共存して生活する事、が、ナマケモノ的なんです。ナマケモノはナマケモノの下にナマケモノをつくらずです。教授というのは、字からして人の上に立つ者、つまり非ナマケモノ的だと言っていました。」

会長「非常勤職員に使われとる教授もおるけどな。」

補佐「会長はこの間、北陸自動車道でパトカーを含めて5台追い越してやった、と言っていましたね。あれだって、ずいぶん非ナマケモノ的って事になりますよ。」

会長「そのかわり、50台くらいに追い越されたで。差引き45台分ナマケモノ的や。」

補佐「そんな数量的処理でごまかしたらいけません。1台でも追い越したらもう非ナマケモノなんです。パトカーは、まあいいとして。」

会長「それにしても、ずいぶん変わった生き物やな、ナマケモノという奴は。」

補佐「彼らの食物は木の葉っぱなんです。彼らはおいしいと言っていたんで、ほくは実際にかじってみたんですがね、堅いし、不味いし、とても美味しいとは思えませんでした。」

会長「そりゃ、君は人間やからな、一応は。君だって、生まれた時から食ってたら美味いと思えるやろけど、今からではもうおそいで、ナマケモノになるには。」

補佐「彼らは、コアラと違って、いろんな木の葉を食べていて、ほとんど選り好みはしませんね。沢山あれば何でもいいという感じで。パナマは熱帯で木が繁ってますからね、だから彼らの食料はほとんど無尽蔵なんです。少なくとも食料に関して争う必要はないんですよ。」

会長「向上心を失なった大学教官みたいなもんやな。」

補佐「もっと徹底してますよ、彼らは。それでね、ナマケモノ氏の後にすぐ続けて、非ナマケモノ的である教授の文章が付いている事にひどく腹を立てているんです。もう原稿は送らんと言っていましたよ。」

会長「原稿が来なんたら、タイプ打たんでええし、印刷せんでええし、それこそナマケモノの仲間入りが出来そうや。それでも、今度はウルグアイあたりから、アルマジロが原稿寄越しよるとちゃうか。」

補佐「アルマジロもナマケモノから聞いてますよ、きっと。せっかくの国際一流誌が自然展刊になりそうですね。どうします。」

会長「学会がなくなって、会長だけが残ってるというのも、ちょっと変だね。ルイス・キャロルの“不思議の国のアリス”に、ネコのないニヤニヤ笑いというのはあるけどな。君だって、ニヤニヤしてるけど、肩書が無くなるんやぞ。」

補佐「補佐なんて肩書、せいせい汚職がばれた時責任をかぶせられる位の役にしかたちませんからね。それじゃ、また来ます。」

(その後、会長の独り言)

「でも、教授の文章を後へくっつけた事、パナマのナマケモノがどうして知ってたんやろ、まだ印刷もしてへんのに。」

(国際的一流学会誌ともなれば、発行される前から、世界中に内容が伝わってしまうという常識を、まだ知らないんですね、会長は。)

その2 会長と第1編集局長の会話

1局長「会長、ごぶさたしてました。」

会 長「ああ、君か。何しに来た。」

1局長「何しに来た、はないでしょう。ほくはまだ、編集局長ですよ。」

会 長「ああそうか、そうやったな。そうそう、それで思い出した。学生の中にな、編集局長やってみたくらいという奴が出てきてな。」

1局長「ほくは地方在住の不在局長ですし、そんな奇特な学生さんが出てきたのなら、喜んで編集局長の席をおゆずりしますよ。」

会長 「まあ、話は最後まで聞け。我が日本生物学会も次第に規模が大きくなってきたしな。」

1局長「そんなに会員増えたんですか。」

会 長「新会員が続々と入会しとる。その代わり旧会員は次々と行方不明になりつつあるがね。」

1局長「それならちっとも大きくなってないじゃないですか。」

会 長「いちいちこまかい事聞くな。とにもかくにも、会員は増えんでも規模は大きくなったんや。」

1局長「そんな無茶な。」

会 長「そもそも無茶から始まった会やないか。無茶を恐れていては、生物学会の維持は成り立たん。それで、会が大きくなると、編集局も1つでは足りないからもう1つつくことにした。その学生を第2編集局長に任命したから、君は第1編集局長に格上げや。」

1局長「編集局長補佐という人がいたはずですけど、その人は格上げしないんですか。」

会 長「あいつは勤め先で完全にホサれとってな。そやから万年補佐や。ついでに言うとかけど、あの補佐はあくまで第1編集局長の補佐や言うとる。君、何か困った事あったらホサしてもらったらええ。」

1局長「おヨメさんの世話してもらおうというのはどうですか。」

会 長「頼んだってかまわんけど、おそらくムダやろな。その話は、補佐の奥さんに頼んだ方がええ。でも、ちょっと恐いで。学生の時、あまりにも正しい事いうて攻めてきよった1人やからなあ。」

1局長「そんな恐いのやったら、頼むの、止めときますわ。」

会 長「それでな。第2編集局長がひがんだらいかんと思うて、もう1人補佐を募集してるんやけど、なり手がおらんで困ってるんや。」

1 局長「ぼくがなってもいいですよ。」

会 長「そらちょっと無茶やで、いくら何でもややこしすぎる。」

1 局長「だって、さっき、我が学会は無茶で成り立ってるって、言いはったやないですか。」

会 長「そやったな。そやけど、1局長が2局長の補佐になるというのは、秩序が乱れる。無茶はええけど、秩序が乱れたらいかん。」

1 局長「……(秩序乱すような本ばかり書いといて)……」

会 長「何か言うたか」

1 局長「いや何も。それより会長、最近何か“学者”にならあったという話、聞いたんですけど、本当ですか。」

会 長「本当や本当や。“カエル西向きゃ尾は東”みたいな論文書いたら、みんな“学者”として認めてくれるようになってな。ついこの間まで“大学の破壊者”やったんやけど。」

1 局長「ちょっと信じられませんが、大学の破壊者から学者へ、そう簡単に変われるんですか。」

会 長「論文書いたら学者、書かなんたら非学者という、単純明快な規準があってなあ。学者いうたらもともと単純やから、こんな規準でないと判らんのや。言うときけど、これはみんな、ほかの人がそう言うてるだけで、オレはそんな規準、認めてへんで。」

1 局長「会長はどう思うてはるんですか。」

会 長「オレは日本生物学会の会長や。これだけは、自分で言い出したんやから、ホンマやで。」

1 局長「それは認めますけど、会長いうたら学者よりエライんですか。」

会 長「当たり前やないか。学者なんかごろごろおるけど、会長となると減多におらんからな。」

1 局長「自称でもいいんでしたら、もっと沢山会長が出来てもいいと思います。」

会 長「それが出来ん所が面白いやろ。みんな、権威いうたらだれかに認めてもらわんとあかんと思うてんのや。あいつ、バカやけど、便利やから使うたれ、いうて会長に祭り上げられても、本人は権威を認められたいうて、喜んで働きよるのや。」

1 局長「それなら自称の方がえらいんですか。」

会 長「まあ、必ずしもそうだとは言えんけどな。」

1 局長「会長が学者になって、学生も沢山この部屋へやって来るとか。」

会 長「そう沢山でもないけどな。君がいたころよりはにぎやかやで。」

1 局長「また、にぎやかに、ええ加減な事言ってるんでしょう。」

会 長「オレかて、ええ事言おうと常々心がけてるんやで。そやけど、口に出したらええ加減な

事になってしまうんや。頭と舌の回路の接続に問題があるんやな。」

1 局長「また道を誤る人が出そうですね。ほくだって、会長の話を聞いているうちに、おかしくなってしまったのですから。」

会 長「そんな事はない。君はその前がおかしかったんで、正道にもどったと思えばええ。」

1 局長「そんな都合良く思えませんね。」

会 長「そう思えるようになったら、君もいよいよ本物や。」

1 局長「本物の“何”ですか？」

会 長「いや、なに、本物の一人前という事や。」

その3 第1編集局長と第2編集局長の会話

1 局長「君が第2編集局長か」

2 局長「そうです。よろしくお願いします。」

1 局長「どうせ会長にだまされたのやろうけど、えらいもんになってしまったなあ。後もどりするんやったら今のうちやで。」

2 局長「ほくも何となくそんな感じがしてるんですけどね。」

1 局長「会長いうたら、いつもニコニコして冗談ばかり言うてるけど、本当は悪いねんで。良之助と違って悪之助や。そやけど、実はもっと悪い奴がいてな。」

2 局長「富家さんですか。」

1 局長「富家さんや斎藤さんも良いとは言えんが、いちばん悪いのは、“半仙半魚”や。」

2 局長「ああ、あのイワナ飼ってる人ですか。」

1 局長「君、知ってるのか。」

2 局長「ええ、去年からよくアルバイトに行ってます。去年の暮れにはイワナの卵を沢山採りましたよ。」

1 局長「もうそこまで深みにはまっているのか。もうしまいやなあ。」

2 局長「何が、しまいなんですか。」

1 局長「いやな。ここだけの話やけどな。会長と半仙半魚との間には、恐るべき密約があるんやで。」

2 局長「密約？」

1 局長「このごろの学生は優等生ばかりでロクな奴がおらん。そのまま社会へ出したら世のためにならん、言うてなあ。」

2 局長「優等生は社会へ出たらあかんのですか。」

1 局長「優等生いうたら、これまでにサセツした経験のない奴ばかりやろ。そんなんが中学や

高校の先生になったら、何かでサセツして落ちこぼれた生徒の気持が判らず、みんな切り捨てるようになる。」

2 局長「そんなものですか。」

1 局長「と、会長は言うんや。そこで、大学にいる間に、何でもええから一べんサセツささなあかん、いうわけだな。」

2 局長「無理矢理サセツさせるんですか。」

1 局長「それも、そんなまやさしいもんやないんやで。まず会長が、得意の舌で精神をスタスタにする。次に、半仙半魚の養魚場へ送りこむと、半仙半魚は会長と違うて、見たところのんびり、ほんわかしてるやろ。学生はそこで、ほっと安心する。気をゆめてた所を、イワナの世話でこき使うて、今度は身体の方をバラバラにしよるんや。こうして優等生は、身心共にスタスタバラバラになって、一卷の終りや。」

2 局長「話がえらい追真的ですけど、ひょっとしたら第1局長の経験とちやいますか。」

1 局長「突をいうと、そうなんや。」

2 局長「それで、高校の先生になって、どうでしたか。」

1 局長「たしかに、落ちこぼれた生徒の気持は何となく判るような気はするな。ところが、それが判ったら、校長やほかの先生と話が合わんようになるんや。このころは教員組合まで管理強化の方やからな。校長からも組合からも孤立してきて、だんだん精神がおかしくなってくる。」

2 局長「バラバラにするだけやなしに、あとまた組み立ててもらわんと」

1 局長「そうやそうや、と言いたい所やけど、会長に組み立ててもらったら、もっと大変なことになるで。」

2 局長「それはそうですね。やっぱり自分で組み立てんならんのかなあ。それでも、ほくはまだ身体も精神もバラバラにされた覚えはないですよ。去年も、イワナの卵採ったとき、半仙半魚の方が先に悲鳴を上げて、もうこれ位にしようや、言うて止めたんですよ。」

1 局長「そう思うやろ。ところが、会長と半仙半魚のやり方は巧妙を極めていてな。バラバラにされてる時は全然気がつかんのや。この間、校長がいやに熱心にほくの配転のことを心配してくれてな。ほくもそれに乗ったら、こんな田舎からおさらばできたんやけど、校長の顔見てるうちに、だんだん素直に聞けんようになってきて、つつい断わってしもた。おかげで、また当分田舎暮らしや。」

2 局長「ほくも気がつかんうちにおかしくなってるんやろか。」

1 局長「イワナの養魚場まで行ってるようでは、相当重症やな。」

2 局長「このころは、でも、会長の部屋へ出入りする学生は、ほくだけではないんですよ。」

1 局長「そりゃいかん。新しい被害者の出んうちに、くい止めとかんと。」

2局長「ほくだってスタスタはいやですよ。そろそろ逃げ出そうかな。」

1局長「君はもうおそいと思うよ。」

その4 会長と第2編集局長との会話

2局長「今回は4つも原稿集まりましたね。」

会 長「5つやろ。」

2局長「会長の会長が勝手に書いてるだけで、集まったうちにははいりませんよ。」

会 長「そんなことあるか。オレだってちゃんと、投稿規定に従って投稿してるんやぞ。」

2局長「でも、ほくは会長の原稿、いっぺんも見ただことないですよ。いつの間にかタイプされて組み込まれているんだから。」

会 長「原稿を見せろというんなら見せてもええが、おそらく読めんやろな。それに、原稿からタイプになるとき、どういう訳か丸っきり変わってしまうから、原稿読んでもムダやて。」

2局長「どうせそんなことでしょう。ところで、本号の“カッコウとヨシキリ”が、学生の間で評判になってますよ。どうして知ってるんでしょうね。」

会 長「補佐が聞いてきた所では、パナマまで出回っているそうやから、地元でもれても不思議はない。だれかプレプリントでもつくったんやろ。」

2局長「それじゃ、著者のナマケモノ氏がコピーしてばらまいたんですか。」

会 長「いや、あのナマケモノ氏は立派な紳士やから、そんなハレンチなことはせん。」

2局長「おかしいな。学生の間では、あれは会長が書いたに違いない、いう事になってますよ。」

会 長「そんな事はない。オレはあんなエゲツない事、よう書かん。」

2局長「著者は“紳士”やったのとちゃうんですか。」

会 長「ああ、そうやった。あんな巧みな名文はよう書かん、というべきであった。」

2局長「では、いったいだれが書いたんですか。」

会 長「いかなるゴウモンを受けても会員の秘密はしゃべらん、というのが会長の責務やから、いかに編集局長といえども明かすわけにはいかん。買収には弱いんやけどな。」

2局長「生物学科の中に、あんな文章書ける人いそうにないし。」

会 長「別に生物学科とは限らんでもええやないか。我が生物学会は全国学会で、北海道から沖縄まで会員がおるし、オレも知らなんだけど、補佐の話ではパナマにもいたらしいかな。」

2局長「でも、あんなに生物学科の事情にくわしい人が、外にいるとは思えませんが。」

会 長「それがあるから不思議やろ。内にいたって何にも判らん奴もいるしな。」

2局長「それは確かにそうですけど。」

会 長「ものの考え方さえしっかり持っていたら、どこにおっても真相が見ぬけるという事や。

それがなかったら、渦中にいても何も見えん。」

2局長「どうせほくは何も見えんほうですよ。」

会 長「そうひがむな。そのうち見えるようになる。もっとも、見え過ぎて困ることもあるんやで。」

2局長「その時は濃いサングラスでもかけることにします。ところで、関西の大物不名誉会員が投稿してきたそうですね。」

会 長「そうや。あいつは若い時から真面目をフロシキで包んで肩にかっいで歩いてるような奴やったんやけど、こんな所へ投稿してくるとは、えらくなってから少し傷んできたんかな。ワープロで打って16ページという大作やから、この号には載らん。そうや、次の21号は、“不名誉会員特集号”にせんか。」

2局長「何か、少々気持悪い特集ですね。不名誉会員いうたら教授以上でしょう。またナマケモノ氏が怒りますよ。」

会 長「金沢大学教職員組合の運動方針は、“各職種各階層の諸要求の統合”や。教授と用務員の要求をどう“統合”するのか、オレにはよう判らんけどな。生物学会も当分それで行こう。22号は100円会員特集にする。」

2局長「何だかよく判りませんが、そんなエライ人が原稿書きますかねえ。」

会 長「それを書かせるのが、編集局長の腕やないか。」

2局長「エッ！ ほくが集めてくるんですか！？」

会 長「当然やろ。」

2局長「……………ハイ、やりましょう。さしあたり、東京と京都と高知へ行きますから、出張旅費出して下さい。」

会 長「……………ムムッ…………… 不名誉会員特集号は止めにするか。」

その5 これが本当の編集後記 (第2編集局長)

去年の10月のことである。会長「そうや、君、編集局受やれよ」と軽く言うので、私「そうですね。いっちょやりましょか」と軽く受けてしまった。当時、大学院に合格して有頂点になっていた時でもあり、私は著しく平常心を欠いていたと思われる。 <少し平静になったとき> 「いったい何やったらええんやろ。投稿された原稿は、無修正ですべて掲載やし、<<この点は、歴代の編集局長は、皆さん悩むみたいだね —— 会長>> 原稿とりに回ったりするんは、この学会の精神に反するし……」 で、結局編集に関する仕事は何もない事がわかった。「何や、仕事がないんやったら心配することあらへん。」

<ついこの間>

会 長「おい、君、編集後記書けよ。」

2局長「編集もしてないのに編集後記書くんですか。」

会 長「当たり前やないか。そのくらいのことが出来んでどうする。他の原稿はもう集まったから、あとは君の編集後記だけや。」

そうだったのである。ここの編集局長というのは、編集もしないで、その内容さえ知らないで、編集後記を書く、というのがその仕事だったのである。

2局長の独り言

「どこが編集局長やねん！それにこんなことしてたら、しまいに研究せんと論文書くようになるんっちゃうやろか。」

(198×年〇月)

2局長「出来ましたよ。」

会 長「なんや、もう書いたんか。まだ原稿1つも集まってないで。」

2局長「じゃあ、編集前記にしといて下さい。」

その6 編集後記の後記 (会 長)

生物学会本部にはこのところ、何人もの局長や補佐がたむろして、勝手にコーヒーを飲みあることないことわめいたり書いたりして、混乱を極めている。少々役職員をつくり過ぎたらしい。その結果が9ページにも及ぶ<編集局だより>となった。このままいくと、本文なしの編集後記特集号ができてしまうかも知れぬ。皆さん、もっと原稿をお寄せ下さい。

なお、本誌はこれまで、本文36ページ建てでも厳守してきた。170円で送れる限度だったからである。然るに、先日郵便局で計ったら、あと2枚くらい増やしてもよい事が判った。そこで、この号から、本文44ページに増やすことにした。(また長い長い話を書ける。ウッヒッヒ)

「日本生物学会」 第11～20号 総目次

- 安仁屋良一：「マニアック記」 11号 361-365 (1981)
- 阿波六吉：京都薄情 17号 589-593 (1984)
- 奥野良之助：魚陸に上る (8) 11号 380-395 (1981)
- (9) 12号 427-431 (1982)
- (10) 13号 445-453 (1982)
- (11) 16号 550-559 (1983)
- (12) 18号 631-639 (1984)
- (13) 20号 706-714 (1985)
- ：人体における胃の役割に関する実験的研究 12号 406-413 (1982)
- ：大学教授のモラル 14号 482-495 (1982)
- ：“1000メートル以下クラブ” 始末記 16号 565-568 (1983)
- ：生物地理談話会 始末記 17号 602-606 (1984)
- ：「京大生態学講座在郷軍人会」 始末記 18号 643-645 (1984)
- ：「専文明批判」……？ 19号 649-653 (1984)
- 加藤喜代志：社会科学の方法—— アダムスミス「天文学史」をめぐって 12号 397-405 (1982)
- ：映画「水痘病—その20年」の感想文を読む 19号 654-670 (1984)
- 加藤初枝：今、教科書問題を考える 11号 366-379 (1981)
- 高 隆三：残さるべき一つの記録 (1) 13号 442-444 (1982)
- ：ある夏のできごと 16号 469 (1982)
- 小林美香：「連想ゲーム」—— 教育編 20号 700-703 (1985)
- 流石三十美：教員採用試験考 16号 560-564 (1983)
- 佐道 昭：江戸時代の飢饉 12号 417-426 (1982)
- 小知間間：黄色い系 13号 458-462 (1982)
- 澄田 宏：アナクシマンドロスの生物発生説に関する若干の考察
- (1) 13号 433-441 (1982)
- (2) 17号 577-588 (1984)
- (3) 18号 613-630 (1984)
- 田中敏之：課題研究発表会の事後報告として 15号 536-537 (1983)
- 丹後支部長 (元編集局長)：丹後だより (1) 16号 571-572 (1983)
- (2) 20号 704-705 (1985)

- ナマケモノ：カッコウとヨシキリ 20号 685-690 (1985)
- にごりめ小僧：閑人だより(1) 20号 692-698 (1985)
- 半仙半魚：偏見と独断(7) 12号 414-415 (1982)
- (8) 15号 525-529 (1983)
- 不名誉教授：例外人生(1) 17号 594-601 (1984)
- 細見彬文：インド・コーチン大学訪門記 14号 470-481 (1982)
- ：西アフリカ、ダカール大学訪門記 15号 516-523 (1983)
- ：北アイルランド、クイーンズ大学訪門記 16号 541-549 (1983)
- 松本郁夫：生態学者の精神分析 13号 454-457 (1982)
- ：生態学者の実存分析 15号 505-515 (1983)
- 生物学誇大事典 「こんちゅう」14号 501 (1982)
- 「とり」 15号 537 (1983)
- 「きか(焔化)」 16号 559 (1983)
- 「だいがく」 18号 630 (1984)
- 「えいご」 18号 639 (1984)
- 「けんきゅうひ」 18号 642 (1984)
- 「すうがくしゃ」 19号 670 (1984)
- 新聞記事から “割りばし”をめぐる農林官僚と製造業者の論争 18号 640-642
- “割りばし論争” そのあと 19号 673-675 (1984)
- 書評 鈴木真一「大学の秘密」 12号 416 (1982) [YK]
- ウ”エーグナー「大陸と海洋の起原」 13号 463-464 [チビ]
- 生越 忠「悪用される科学」 13号 464 (1982) [チビ]
- マーチン・ガードナー「奇妙な論理 — たまされやすさの研究」 13号 465
- (1982) [チビ]
- 伊沢紘生「ニホンサルの生態」 14号 496-500 (1982) [奥野]
- 山崎今朝弥「地震・憲兵・火事・巡査」15号530-535 (1983) [栗間]
- 田中公雄「車を捨てた人達」16号 569-570 [下菊マダム]
- レイ・メレティス「睡眠革命」 19号 671-672 [チビ]
- 広告 薬の安全性を私達の手で! 19号 683-684 (1984)

?!? 会 計 報 告 ?!?

1984年4月 ~ 1985年3月

収 入		
1000円会員	35人	3500円
1000円会員	92人	92000円
2000円会員	14人	28000円
小 計		123500円
昨年度くりこし		42600円
総 計		166100円

支 出		
上質紙	9000枚×2円	28000円
表 紙	1000枚×3円	3000円
ファクス原紙	40枚×70円	2800円
印刷インキ	2本×900円	1800円
送料 18・19号 その他		66000円
総 計		91600円

差引 次年度くりこし 74500円

<監査報告>

まあ、こんなもんでっしゃろ。

日本生物学会会計監査 夢籍 忍太郎 印

「日本生物学会」 設立趣意書

なんにも目的はないけれど、「日本生物学会」なるものをつくろうと思う。動物学会や植物学会はあるが、日本にはまだ、生物学会と称するものはない。しいていえば、それが設立の動機である。

会の目的はないが、事業はおこなう。

その一つは、会誌の発行である。これを「日本生物学会誌」と名づける。刊行は不定期とし、原稿が集まり次第発行する。したがって、原稿が集まらなければ、永久に発行しない。内容は、会の名称にふさわしいものとする。ただし、「生物」には当然人間も含まれる。たとえ天文学でも、もしそれを人間がやったのならよいことになる。また、「日本」生物学会であるので、日本語以外は受けつけない。受けつけた原稿は、無審査・無修正のうえ、無責任に掲載する。

第二の事業は、「大会」である。年一回金沢において開く。大会は、しゃべりたいものがしゃべり、聞きたいものが聞くことによって成立する。したがって、しゃべりたいものがいなければ直ちに解散する。（聞きたいものがいなくても同様である） 二次会はさまたげない。

会員の資格は“非教授”とする。要するに、教授以外であればだれでもよい。もっとも、教授以上の社会的地位の方は、おことわりすることがある。

会員の義務は、会費をおさめること、及び、会費の行方について、深く追及しないことである。会費は当分の間、定職についているもの年1000円、定職なきもの年100円とする。善意の寄付はこれをこぼさない。ただし寄付しても、何の特典も与えない。

会の“管理・運営”は、当分の間、会長の独裁とする。会員は会長に対し、団交権を持つ。したがって、総会は開かない。団交は文書でおこなってもよい。

本部は、金沢市丸の内1の1 金沢大学理学部生物学教室 生態学第一研究室 におく。連絡はすべて本部あてにおこなうこと。

各地に支部を設立することが望ましい。支部長は自称すれば直ちに発効する。支部の管理運営は支部長の独裁とし、本部は一切関知しない。

以上の趣旨に賛同の方は（あまりいるとは思わないが）、あるいは賛同しなくとも、同封のカードに氏名・住所・電話番号をかき、会費を同封して、本部まで送られたい。会誌の発送をもって受領書にかえる。原稿がなければ永久に出ないことを御了承のほどを。

1977年5月26日の佳き日に

会長 奥野良之助

< 会 則 追 記 >

教授もしくはこれと同等の社会的地位にある者で、どうしても入会を希望するものは、“不名誉会員”とし、会費2000円を徴収する。

学部長、学長もしくはこれに同等な社会的地位を有する者で、何としても入会したい人は、“特別不名誉会員”とし、会費4000円を徴収する。

現普通会員も、出世したときは、これらに準ずる。

会費の送金は、郵便局の下記振替口座を利用するのが、最も安上り（1回15円）である。もちろん切手でもよく、100円を書留にして350円かけて送ってもらっても、当方は一向に差支えない。

金沢 40763 日本生物学会

日 本 生 物 学 会 誌 投 稿 規 定

- 1 日本語に限る。
- 2 漢字はなるべく当用漢字に限ること。タイプの括字がない時は、勝手にカナにかえることがある。
- 3 原稿の長さの制限はしない。ただし、1号は100枚（400字づめ）しかはらないので、適宜分割掲載することがある。
- 4 形式・内容とも、全く自由とする。読む・読まないは読者の自由であるから、読者のことなど考えずに書けばよい。
- 5 匿名、変名、ペンネーム、いずれも可。もちろん本名でもよい。
- 6 いずれの場合も、肩書、所属などは不要。
- 7 寄稿者には本誌5部を進呈する。別刷のほしい方は、原稿にその旨誌しておくこと。
- 8 図、写真も可。ただし写真はおそらく、何が何かわからなくなるものになる。

1982年8月 改訂

(1977年7月の第1号35ページ
記載の投稿規定は、廃棄処分とする)

日本生物学会誌 第20号 1985年6月14日

編集・発行 日本生物学会
金沢市丸の内1の1
金沢大学理学部生物学教室
生態学第1研究室内

編集無責任者 奥野良之助

許可無断転載